

4 先天性冠動脈奇型の2例

東京医科大学内科第2講座

小林哲也、藤田雅巳、矢部 潔、酒井 俊、飯田信行、前田和哉、内野秀治、高沢謙二、清見定道、山澤育宏、伊吹山千晴

先天性冠動脈奇型のうち単冠動脈は非常にまれな心奇型であり、冠動脈造影を行なった患者のうち0.4～0.83%に認められたという報告がある。今回報告した回旋枝より右冠動脈が派生する例は、Chartmanらによると心カテーテル施行患者3750例中1例を認めたのみであり、Smithの分類ではtype 1であり合併心奇型もなかった。また、単冠動脈と心筋虚血の関係が注目されており、本症例に認めた心筋壁運動の低下と間質の線維化も慢性的虚血状態の存在が考えられた。次に冠動脈起始異常は先天性冠動脈奇型の中でも比較的多く、今回報告した左前下行枝と回旋枝の分離起始は心カテーテル施行患者の0.4～1%に認めたと報告されている。

5 開心術における貯血式、回収式自己血輸血の現況

(外科学第二) 阿久津博美、未定弘行、橋本雅史、河内賢二、長田一仁、山口 寛、石丸 新、古川欽一、(輸血部) 佐藤 寿、羽田雅夫、長沢 洋、藤巻道男

心臓外科手術において、同種血輸血に伴う肝炎発生率は15～20%と高率で、また最近ではエイズやGVHDが注目され無輸血手術への関心が高まっている。教室では、心臓手術に際し自己保存血と術野出血の再利用を行っており、同種血輸血節減の現況を報告する。

対象は1987年11月から本年6月までに行われた開心術35例で、Haemonetics社製Cell Saver4を用い術野出血の回収し洗浄赤血球として輸血した。また、13例に術前3週、2週、1週に200～400mlの自己血採を行い、手術当日輸血した。

無輸血手術は35例中11例(30%)で、術前に貯血を行った群では13例中8例(60%)であった。Cell Saver4による回収式自己血輸血と貯血式自己血輸血を併用することで約60%の症例で無輸血手術が可能であった。今後、自己血採血の適応拡大により80%の症例で無輸血手術が可能と考えられた。

6 閉塞性動脈硬化症に下肢静脈瘤を合併した1例

東京医科大学霞ヶ浦病院循環器外科

伊藤茂樹、堀口泰良、藤原靖之、箱島 明

症例は79歳男性、左下肢疼痛にて入院、安静時疼痛認められ、Fontaine分類Ⅲ度に属し、下肢Angiographでは、左下肢の浅大腿動脈に閉塞が認められ、左下肢において炎症を思わせる静脈瘤も存在していた為、左下肢の静脈瘤の炎症を治療し鎮静化した後、F-Ppass術施行。静脈瘤に対しては、結紮術を行なった。本症例においてはBypass術と、Varix根治術を一期的には施行せず、静脈瘤に対しては結紮術のみ行ない、ASOに対しては人工血管置換術を施行して、良好な結果を得た。

7 難治性心不全に対する持続的血液濾過法(CVVH)の使用経験

東京医科大学霞ヶ浦病院循環器内科

白石裕盛、犬塚 博、本多教章、巨 章、阿部正宏、落合恒明、麦倉泰行、阿部敏弘

薬物療法に対して抵抗性のうっ血性心不全に対してECUM法を用いて除水を行う事があるが、血圧低下等により充分効果が得られない事が多い。最近持続的に限外濾過を行うCAVH法が試みられている。本法は動静脈カニューレション及び大量の補液を必要とする。今回我々は難治性心不全症例に対して新しい試みとして、大腿静脈ダブルルーメンカテーテルを用いたCVVH法を行い、補液せず排液側に定量装置を接続することにより、毎時一定量の除水を行い効果を認めた。

今後本法は難治性心不全症例に対して有効かつ安全に施行出来るものと思われた。